

## 眺望

丘の上に薄い日射しが降り注ぎ  
思い出から香りを全て洗い流す

既に久しく囁く者はなく  
通り過ぎゆくのみ

草の中に寝転がれば  
背中にはこそばゆい自然の息吹き

無<sup>せ</sup>感<sup>じ</sup>覚<sup>ろ</sup>に等しい心<sup>うち</sup>の中に

知らず知らずのうちに盛り上がる、これは何者か

全ては無質量から成り立つと知れば  
何故この世に苦悩のあるものぞ

ましてや全ては場の歪みより成ると知れば  
何故苦悩と歓喜の区別のあるものぞ

ふと己が左の手首を見やれば  
か弱くも正確な血の脈動

そして立ち上がり、ぐるりを見渡せば  
あちこちに、ぼつりぼつりと人の歩む姿

ああ、所詮は相対的でしかなかった  
全ては全ての一部であったのだ

既にして己が存在は消滅し  
境界を引くことは不可能だ

私の髪をなぶる風・・・  
いや、その風さえも私の一部なのだ

衣をまとうことも脱ぎ捨てることもないだろう  
この大気こそが私の衣であるのだから！

(1990.1.13)